ドックの一家

山崎　敢造

横須賀の店へ、母から電話があったのは閉店後だった。公衆電話から腕時計を見詰め、タイミングを見計らった母らしい心遣いが伺える。電話なんて珍しいと思いながら、受話器を取ると（父さんが倒れた）と言う。驚いて一瞬、受話器を握りしめた。

五十を出たが病弱でもないし、思い当たる節はない。住込みのため店長に事情を話し、横浜にある保土ヶ谷の実家へ飛んだ。

父は一年前まで横須賀で、米軍水兵向けの同じ土産店を経営していた。従業員十名を抱える規模で、クリスマスセールに合わせ、夏から商品を増やし、在庫が溢れんばかり溜まった頃、漏電による火事で全焼した。

高卒後は父の店を手伝い、二代目御曹司の気分でいたけど、束の間の夢に終わった。

八方手を尽くしても、少しの火災保険では賄い切れず、破産の憂き目を見る。その後は保土ヶ谷で、リヤカーを引く八百屋に転じ、自分も一変して、近所の知り合いの土産店へ、住込みで拾われた。

父母と祖母、自分も含め、兄弟五人の八人所帯に、逃れようも無い借金が、頭から被さった。妹達の学費はおろか、一時は三度の食事もままならない生活を強いられた。

横須賀線に乗っても、長男としてこの先どうしようか、いたたまれなかった。働き手を失った実家を思えば、のほほんと過ごす店員では済まされない。

丘陵の上にある家まで歩く間、よくよく考えると、二十歳の身で父に代わり、母と一緒にリヤカーを引くのも情けない。辛いというより恥ずかしいが、やらなければ八人が路頭に迷う。鬱陶しい思いを引き摺り、平屋の戸を開けると、父がリヤカーを修理していた。

建て増しの家はドアを開けてすぐ、六畳ほどの物置になり、次いで玄関になる。以前は野菜を積んだり、リヤカーを収納した場所だが、見回しても父の姿しかなく、変わって煙突掃除でもしたような、汚れた作業着が、何着もぶら下がっていた。父はいぶかる顔で、

「一郎か、何で帰って来た?」

ぶっきらぼうに問う。（電話で倒れたと聞いて）と言おうとした矢先、母が姉さん被りを取り、首を左右に振る、何も言うなのサインと判った。妹や弟もゾロゾロと顔を出し、いつものお土産を期待する様子でもなく、無表情で押し黙るのが不思議だった。

とっさに様子が変だと察し、場を繕った。
「みんな元気なの？」
「病人はいない。今日はどうした？」
手も休めず振り返る。母の電話も知らないようで、連休が取れたとごまかした。帰郷は盆正月の習わしから、不審に思うのだろうが母は奥の部屋を指差した。四畳半は祖母の部屋だが、母は背中を押して、父との会話を断ち切った。
「倒れたって聞いたけど、元気そうだね」
祖母は首を振り、母はうつむくと両手で顔を覆い、苦しそうに言葉を絞り出す。
「……あれで病気なんだよ」
元気な姿を見ただけに呆気に取られた。いつもにない険のある口調も気になる。誰も口数が少なく、正月に帰って以来五ヶ月で、気配が一変したのを感じ取った。沈黙はただならぬ様相だが、母は困惑した顔から、
「倒れたと言わないと、すぐ来てもらえないと思って。……でも、本当に病気なんだよ」
四畳半は四十ワットで暗いけれど、急に老けた母を見て、病気なのかと案じてしまう。品のある色白の顔が、見るも無残に痩せ衰え、まともに見るのが可哀相だった。一体、五ヶ月で何があったのか、きざしがあったのに見落としたろうか。
火事以来、借金で苦労するのは察しても、家族は想像を絶する雰囲気に変わった。
「どんな症状？」
「父さんは起きている時はいいけど、床へ入り一眠りすると、夜中でも起き出して、リヤカー引いて出掛けるんだよ」
「えっ！……それが病気？」
「心配で付いて行くけど、昼間リヤカーを引いた道を回って来るの。初めの三日は止めたけど、その後は仕事に出ると言い張り、無理やり払いのけて行ってしまう。お婆さんと押さえても、男の力は止められないよ。精神的な病気だから一郎に来て貰った」
「……じゃあ、ノイローゼ？」
「そう、始末の悪い病気だね」
「起きている時に、話せば判るだろ？」
「昼間は判った、判った、って言うけど、眠ると駄目なんだよ」
床へ付く病人なら判るが、五体満足でリヤカーを修理し、通常と変わらぬ素振りは信じられない。母は困り果てたように、

「夜中に歩くから、早朝の仕入れに間に合わないし、リヤカーを壊されたりして」
「壊されたって？誰に」
「お店を出す八百屋さんから、商売の邪魔とか、町内を回るなと言われて。……でも、お互い競争だ！って、父さん聞かないから、リヤカーをひっくり返されたり、ジャガ芋を投げられたり何度も妨害に遭ったの。借金の焦りから思い悩んで、病気になってしまった」
「やめたのになぜ修理している？」
「リヤカーは要らないけど働き者だからね、何かしないと気がすまないらしい」
「今でも出歩く？」
「そう、空のリヤカー引いて」
「えっ、それは異常だ。八百屋をやめて何をしている？」
「日雇いで横浜のドッグへ行っている」
「そんな状態で勤まるの？」
「昼間は大丈夫だから、いつもと変わりなく出て行き、決まったお金を貰ってくるよ」
見た目は何でもないから不気味で、聞いている内に恐ろしくなった。大黒柱が倒れた衝撃は家族に反映して、思い煩う様相がはっきり判った。
子供の頃、威厳のある祖母から身なりや言葉遣い、それに（相手の立場で考えなさい）と注意されたが、乱れた白髪に櫛も入れず。（もう少しなんだ）と言い、今にも泣き出さんばかりで見る影もない。母も手に負えないとあらぬ方向へ向く、そんな姿を初めて見た。
自分が帰ると知って母は格子模様のシャツを着ている。横須賀の店があった頃、ミシン油が付いて売り物にならず、父から渡された物だ。アメリカ人向けは、寸法が合わなく派手な柄なので（近所へ出歩けない）と笑ったが、今では店の思い出として、家で大事に着ていた。シャツはお前が頼りと言っているようで、重い気分になる。そんな不安から妹三人と末の弟は押し黙ったままだ。長女が高校、次女と三女は中学、弟は小学生だった。祖母の（もう少し）とは借金か、長女の卒業が近いので、後押しになれると取ったが……。
安易な薬の投与では治らないし、入院して手術をする病気でもない。どうにもならない病と、末の弟まで知っている。（有楽町で逢いましょう）の、鼻歌すら聞こえた家族は、消沈した顔が並び、異常な事態になった。もっとも弟が故意に大人の歌を口ずさむのは、感心を引き、叱られて道化者を演じるので、一家の団欒に役立っている、自分も意識してその過程を通ったから判る。といって、これから先は甘えではすまされない。
自分に何ができよう、幾ら模索しても有効な手段は見つからなく、逆にみんなから責め

立てられるような、離れた立場だと気がついた。
保土ヶ谷の実家と店の距離は横須賀線の一本で、一時間弱で駆け付けられ、さして遠くもない。祖母も母もお前の加勢がないからだと、思っていないか。姉弟も兄さんがいたら病気にならなかったと言いたいのか。（じゃ、住込みの身でどうしろというんだ）と、開き直りたいが、薬で病気が治らないから電話をしたので、祖母と母を目の当たりにして言えなかった。ただ、黙って成り行きに任すのも無責任だし、祖母の言う相手の立場に立てば、物の一分もしないで、横須賀の店をやめようと決めた。
住込みは食事も店長の奥さんが用意して、休日は衣類を洗濯するくらいだ。朝から同じ住込みのター坊と、横須賀の海に浮かぶ猿島へ行き、釣りをしたり、繁華街へ出て映画を見て回り、キラキラ輝く時間を謳歌し、恵まれていた。だが、火事の後遺症は借金として残り、父が苦境に立ち、母がリヤカーを押しての稼業は楽ではないと判っていた。
ター坊と一緒に洗濯をしても、手が止まってしまい（一郎、なに考えているんだ）と何度も言われた。ぼんやり釣糸を垂らし、ウキを眺める間も、二本立映画の幕間でも、どうしているのか心配もした。しかし、口うるさい祖母や親から離れた気楽さもあって、休日は拘束もなく遊び呆けられ、温室みたいな環境は捨て難い。盆正月に帰っても、上辺しか見ないし、いや、見ようとしないから家業がはかばかしくないのも、見抜けないのだ。
そんな経緯から父が悩むのも察しられず、給料から雀の涙ほど送っても、赤貧洗うがごとしで、家族の口は干上がっていた。こんな切っ掛けでもなければ踏切りが付かない。なぜなら相手の立場で考えもしなかった。
「ドックで何をしている？」
「船の掃除だけど、物置の作業衣で判るように油まみれになる。考えようには良かったと思っているよ。疲れてぐっすり眠るから、最近では夜中に出歩くのも少なくなってね」
「そんなの気休めで、治るわけがない。見守る必要があるから俺は店をやめる」
「でも、父さんは反対するよ」
「一緒に寝起きして、夜中に出るのを止めるのが先決だ、働くのは近くの横浜で探す」
その夜は父を交え、祖母と母、長女の五人で出歩く必要はないと話し合った。
しかし父も、かたくなに店をやめるなと、一歩も譲らない。若い頃、家族の犠牲になって、希望した職に就けず、悔しい思いをしたと言う。仮に望み通り職が適っても、震災や戦争とか世の変遷で、人の運命はどう変わるか判らない。現に火事に遭ったので、せめて子供達は波乱のない道を歩ませたいと熱が入る。

悔やむ様子から、正常な意見に取れても、早急に治す必要がある。手遅れになれば、精神病棟へ隔離される恐れを感じた。放置できない状況から深夜まで家族会議は続いたが、自分もやめる気持ちに変わりない。みんなは同意しても、父とは平行線を辿った。

翌朝だった、（夜更けに寝付き昼間の疲れもあって、起き出す素振りもなく助かった）と母は言う。そんなの一時的なもので、当てにならないのだ。

昭和三十四年、皇太子、美智子さまのご成婚の年で、岩戸景気も合わせ、世の中が沸騰した年だ。街には（黄色いさくらんぼ）（南国土佐を後にして）の歌が流れても、鬱陶しい思いを引き摺り、どう考えても自分一人は流行語の、（私は貝になりたい）の心境だった。といって両親から（家計が苦しいから手伝ってくれ）とは一度も言われてない。

父と話し合うなかに、店をやめればお前の将来がないと言い、渋る様子から横須賀の店長と、暖簾分けの約束があったらしく、頑固なまでに反対した。

それも家族は承知だから、言い出せないのだ。将来を見据えた意見はありがたいが、自分は良くても、七人が犠牲になければ本末転倒だろう。昼間は正常になる不思議な病気なので、反応も確かで張り合いもある。ただ、置かれた立場を認識しないから困る。家族が安心できるのは金銭より治すのが先で、どんな薬より、父が心より安心できる環境でなければ、治らないと思った。だが、本人は健忘の時間があって、正常と思っているから始末が悪い。（父さんは夜中に出歩く夢遊病者なんだ）と言っても、都合の悪い部分は忘れるし、懸命に働く昼間に、面と向かって言えなかった。夜中の徘徊は母や祖母では手に負えないので、同意を得ないまま店をやめた。自分が阻止すれば、家族は平穏無事な以前に戻れる。そんな一念で突発的にやめたので、明日からの職はなかった。

暑い最中、職安へ通っても臨時工や日雇いの類いで、父の言う終身雇用の会社はなく、早計だったと焦っていた。丘陵の下に祖母と知り合いの老婆がいる。どちらかと言えば世話焼きタイプで、八百屋の頃から世話になり、やめた今も時折茶飲み友達はやって来た。声が大きく、饒舌なので敬遠したが（若い者が職に就かないと、遊び癖が付く）と詰め寄る。言い訳するのも面倒で、黙って耐えていた。ある日、手を取るように引っ張られ、近所の土木現場へ連れ出された。丘の上は通りから離れると舗装もない道で、リヤカーがやっと通れる田圃の畦道になる。後を追って歩くにも楽な時間を過ごしただけに、小柄でみすぼらしい老婆に、すがる姿は情けなかった。

保土ヶ谷は丘陵の多い土地で、上にも中腹にも家屋が立ち地盤がゆるいので、土砂崩れの事故もあった。近くで土留の工事は承知でも、シャベルやツルハシを持たされるとは思わなかった。家に近いし顔見知りも通る現場は、顔を隠しモッコを担いだ。一ヶ月で仕事に慣れたが、徘徊する様子もなく、老婆に断らずに見切りをつけた。

近所で父が懇意にする大沢氏へ、職を頼みに一緒に行った。（お前には無理だ）気乗りしない父だが、Yドックへ入れたのも大沢氏の口添えと聞いたからだ。ただ、欠員はなく東神奈川のAドックなら、責任者の立場なので、面倒みると勧められ、以外にあっさり決まった。（経験がなくても、甲板仕上工は健常者なら勤まる。忙しくて日曜祭日も休めない、日給は四百円）と事もなげに告げた。（Yドックへ一緒に紹介した人は？）と父は聞かれ（今も続いています）と返事をする、大沢氏は満足そうで、顔が広いのも知った。

ラーメン七十円、カレーライスが百二十円の時、妥当かどうか判らないけど、父の四百円を思えば従うよりない。昼間は症状が出なく一緒にいる必要もない、夜中を見守ればいいと判断した。

周囲が寝静まる頃（仕事に出る）と騒ぎ出すから、近所は気が狂ったとしか判断しないだろう。家族は引け目を感じたので、職が決まると喜んで、心強いと言う。

みんなは良くても自分だけが抱える、一抹の不安もあった。YドックもAドックも横浜に住めば、名の通る大企業と知れ渡る。入社試験もなく仕事に就けても、正社員の採用ではないからだ。社員からほど遠い下請け企業で、大沢氏が請け負う下働きになる。社会保険もなく有給休暇、退職金すらない日雇いなので、父が将来を懸念するのも判るが、やらざるを得ない局面なのだ。ドックの話を聞いても、父の予備知識は（店員とは違う、辛い仕事になる）と言うだけで、甲板仕上工の内容まで知らないのだ。シャベルを持つのと違って、未知の職場の不安だが、勝手にやめたので、後戻りはするまいと思った。

東神奈川駅から海へ向い、真っ直ぐ伸びる道になる。母が用意した衣服と地下足袋を風呂敷に包み、不安も包んで歩いていた。通勤する大勢の人は自信に満ち、自転車や徒歩で我が物顔で通るが、甲板仕上工とは何をするのか、気掛かりになると思い通り足が進まなかった。見上げる前方の空に大型クレーンが、ドックを占拠したように林立している。店員しか知らない身は人の手で造った物と判っても、威圧的な脅威に感じた。自分に勤まるだろうか、心配しながらクレーンの足元へ来て、Aドックに突き当たる。守衛所の前に大沢氏が立ち、三人を引き連れ入門する、おどおどする様子から同じ新人と知った。

立派な屋舎を通り過ぎる、工場の群れに寄り添うように建物が並び、見るからに侘しい小屋で立ち止まる。入り口と思われる戸に（大沢組甲板仕上部）の板が下がっていた。振り返れば格納庫のような工場の前に、象が鼻をヌゥーと突き出す形で、船首がある。真近なので、船が工場にぶつかる寸前に、止まった格好だ。陸地に乗り上げた感じだが、ドックは船の仕事なんだと思い直した。薄暗い中は二階に区切られ、汚れた作業衣が掛けられ、下が作業場になる。

横須賀の店では電灯が煌々として、陶器すら華やいで見えたが、急転直下、暗くて乱雑な上に、汚い職場に面食らう。無造作に機械や資材が置かれグリス（固形油）や重油、ペンキに塗れた男がひしめき合い、澱んだ臭気すら流れ、初めて見るドックに固唾を飲む。どんな仕事なのか、自分に何ができるのか心配が募った。大沢組の他に甲板仕上は三組もあり、お互い競い合っている。（人手不足から手を取って教える暇はない、熟練者を見習い盗んでも覚えろ）と、新米には背筋が寒くなる挨拶だ。組の者はおよそ三十人で、大沢氏を取り囲み、一通りの紹介があった。新入りは増淵という、四十代の指導員に従うよう指示を受ける。さっそく工具を持ち現場へ出るので、それも理解できないのだ。

「今日から仕事ですか」

「当り前だ、遊んで金をもらうつもりか」

何日かは広い工場内の案内とか、道具の使い方や説明など、指導があって出されるものと思った。店員だって、どこの棚に何があるとか、商品の説明ぐらい覚えないと、商売にならない。盗んでもと言われても、ただ、健常者なら勤まるのか、勝手が判らなく、漠然と巡らしていた。決まりだからと増淵（皆は増さんと呼ぶ）が、安全帽を差し出す。誰かのお古らしく、被る前から汗臭くて閉口した。こんな鉄兜みたいな物を被るとは、一体どんな作業か、新入りは問うのも恐れ多い。増さんは虫の居所が悪いらしく、新参の島田が、なぜ少ない道具を、鞄（油缶に紐を付けた物）で担ぐのかと聞いても、今に判ると言うだけで、もう一人の佐野が、どの船かと聞いても、行けば判ると素っ気ない。まともな返事がないと知り、安全帽が臭いなど、口にできなかった。缶に入った道具もハンマー、タガネ（鋼のノミ）と、ポンチやペンチ、モンキースパナ、木ハンマー、大小のヤスリ、パイプレンチ等々、使い方や名称すら判らない。カナヅチしか知らない者は使う内に覚えた。

少ない道具といっても自分には重く、肩に食い込み、歩く度にガチャガチャ音がする。知らない者は一人前に思われても、ハンマーひとつ打てないので、まやかしの姿なのだ。

連れて行かれた先は二番船台だった。船の建造物には軸先に船首楼、中央に船橋楼、

艫に船尾楼があり、船橋の前後に荷を入れるハッチ口がある、それに類する船を貨物船と知った。船と結ぶきゃしゃなタラップを渡り、見回すと、まさしく中央に船橋楼のある典型的な貨物船だった。そうか、角度の急なタラップは両手で手摺に掴まるから、道具は担ぐのかと思った。船首楼には両舷に水密ドアがあって、風雨を凌ぐ険固な扉になる、水漏れのためパッキンの取替え作業になる。引率の増さんは、急に改まって（お前ら幾ら貰っている？）口々に（四百円）と応えた。それが面白くないらしく、

「俺も同じだ。お前達は一人前なので、三人でパッキンを取り替え、水漏れのないよう仕上げろ。心配するな、島田は経験がある」

「俺は小さな船しか知らないのです」

島田は自信なさそうに言う、三人は唖然となり、顔を見合わせた。

「組の出入りが激しく、三十人いても二十人は素人で、教える暇はない。マストやハッチカバー、ベンチレーターなど現場を見回るので、お前らに付いてもいられない。中でも水密ドアは簡単なのだ。作業手順は最初にドアを外し、パッキンを新しい物と取り替える。放水テストを受け、ＯＫなら完了だ」

「でも、どうやってするのか……」

「右舷を見ろ、余所の組も同じ仕事だ。今朝の訓示で真似ろとか盗めと言われたろう」

「何日で仕上げるのですか」

「一つの扉に二日も三日も掛けたら赤字になる。午前中だ」

「初めてドックへ来たので心配です」

「甘ったれるな！みんな素人の集まりだ」

捨て台詞を残して去り、三人は呆然と見送った。（ひどい指導員だな）佐野が呟いた。

島田は一つ上の二十一で、鶴見や川崎の造船所を渡り歩いたらしく、三人の中ではリーダー格だが大型船は初めてと言い、それも数ヶ月の経験だった。小柄な佐野は思ったことを口にし、一見、生意気に見えても十九歳で、同じくドックは初めてなのだ。

三人は手が付かなく、ハッチの縁に立ち、甲板を右往左往する配管工や、ガス電気の溶接工に、圧倒されながら眺めていた。そんな間があって誰も口にしないが、一人前の金が頭にある。やらざるを得ないと話し合い、真似する結論になる。島田は外すにも段取りだと、抜け目なく右舷へ寄り、熟練工が取り組む作業を探って来た。

「扉をチェーンブロックで吊り、一人でやっているぞ」

「何だ？チェーンブロックって」

「鉄の扉が重くて、一人や二人で持ち切れない。蝶番のピンを抜けば扉が落ちるから、あらかじめ吊ってある。チェーンで上下の加減ができて、外した後に取り付ける時も、これを使えば簡単なのだ」

扉と言っても上下左右に、六本の棒状の取手があって、各々三十センチの棒で閉めてある。ハンマーで叩き緩めないと、扉すら開かない。右舷を見れば外してあり、甲板上で横にし、古いパッキンを剥がしている。三人は遅れを取ったが見習い、鉄製の重い扉を横にした。楕円形の扉は周囲に凹形で溝があり、扉を囲むように、ゴムのパッキンが埋めてある。ボロボロの古い物を剥がすにも、錆び付いたり溝が潰れたりで容易ではない。

気が付くといつのまにか、甲板上はエアホースやガス電気のコードが、足の踏み場もなく張り巡らされ、唖然となった。

会社の工員の他に臨時工、我々のような下請も同じ船に就くから、飴に群がる蟻のようだ。活気に満ちて、威勢のいい声も飛び交っていた。三人は汗だくになって、新しいパッキンに接着剤を塗り、木ハンマーで叩き込んだ。代わる代わる右舷を見ては真似、やり出すとみんな無我夢中だった。チェーンブロックで吊り、ピンを差し、扉を動かしてみる。ギイギイ鳴る音はグリスを塗り、音をなくして仕上げた。三人で右舷を見れば、まだ扉は横になっている。島田は得意になり（簡単だった）と言うのを聞き、この時点で我々は勝った。もっともこっちは三人だが、午前中に仕上り誇らしくてならない。増さんへ報告のため佐野が走った。増さんは佐野に、一抱えもあるホースを担がせ、資材の散乱する甲板を、足元を気にしながらやって来た。いきなり放水を始め、水漏れテストになる。満遍なく掛け扉を開けると、内側は水浸しだった。増さんは苦虫を噛み潰した顔で、

「これで仕上げたって？島田も判らないのか。水密ドアは水漏れしない扉だ」

教えもしないのに意地悪く聞こえた。チョークを取り出し、パッキンが当たる縁に塗り付ける。扉を締めて、六本のハンドルを手で回す。力が足りないと見て足で蹴った。

再度、扉を開けると、黒いゴムのパッキンに、白いチョークが付く。だが良く見ると上下の二箇所は途切れて、そこから漏れが生じていた。増さんは全面にチョークが付くようたしなめ、扉はまた外された。折角仕上げたのに、そう思うとやり切れない。シャベルで言われた所を掘れば、掘っただけの結果が出たが、ドックの仕事は見た目ではすまされないと知る。貨物船だけに荷か材木でもぶつけたらしく、甲板に置くと歪みでガタガタ音がする、曲がりを直すのが先決で、増さんも手に余した。陸揚げして作業場で直すことになり、四人で運んだ。重くてかさ張る扉は、船から降ろすにも一苦労する。

狭いタラップは手摺に触れない位置に上げないと通れない。一人でも手を離せば、他の三人では持ち切れないし、落とせば足に怪我をする。誰もが真剣で、渾身の力を込めて乗り切った。

ペイントで縁取りされた通路へ出て、台車に乗せた。島田は汗の顔で見上げ（あの大型クレーンで吊れば楽だった）と言うが、増さんは透かさず（順番があるし、下請けは後回しにされる。夕方に吊られても、ありがたくもない）。そんなものかと納得したが、下請けはすこぶる疎外された階級と知った。本来、外した時点で曲りなど判るらしく、直さなければパッキンを替えても漏れると言われ、我々の仕事は徒労だった。自分達が運ぶ間に右舷はテストも合格して、熟練工の姿すらなかった。

扉を作業場で直す間、ブロック（荷をハッチから出し入れする滑車）のオーバーホールになる。この船には四つの船倉があるから四隅にデリッキが立ち、その棒の先端と根元にシャックル（U字型の止め金具）で、ぶら下がるブロックがある。一つの船倉に八個あるので、計三十二個になる。一つが四十キロはあろうか、鉄の塊にも思える重量物で、動かすにも閉口した。グリス（固形油）にまみれ、滑るから持ち辛く、船首へ集めるのも精一杯だ。片手で持ち切れなく、両手で抱えれば足元が見えないし、衣服にグリスがベッタリ付く。甲板にはエアホースや配線が縦横に走り、つまずいて転び二度も投げ出した。滑車は鋳造物で、割れる恐れから怒鳴られ放しだ。

汗が目に入り痛くて涙がでる。両手は棒になり感覚もない。かんかん照りの屋外で、日陰もない。何でこんなに辛いのか、すぐ浮かんでしまう。店でも木箱に入る重いディナーセットや、コーヒーセットもあったが、台車を使うから不便はなかった。

甲板はホースや配線が蜘蛛の巣に張り、台車はあっても使えないのだ。

しかし、ブロックを投げ出すミスなど、本来、許されないと知った。大怪我はするし、人に当たればなおさらで、（気をつけろ！）の荒い声が飛び交っている。

見上げるマストやベンチレーター（風の取り入れ口）にも、ロープが繋がれ、ヤモリみたいに人が張り付き、錆止めペイントを塗っていた。落ちたら命はないし、彼らが物を落とせば、下の者は怪我をする。だから安全帽を被るので、危険が伴うから必然的に、取り組む姿勢は真剣になり、緩んだ顔はどこにもない。

父の（店員と違って辛いぞ）とは、労働が加算されるからで、危険を伴わない店員の気分では、一歩も踏み出せない。楽な経験があるから辛いので、白紙の状態ならこんなものかと諦めもする。そう察するとドックは容易でない職場だと、気を引き締めた。

ブロックの外枠を外し洗油で洗い、滑車に亀裂や割れがないか、これも検査を受ける作業になる。バラスにも、どれがどの部品か組み立て時に混乱しないよう、増さんがポンチで印を付けて回る。佐野は割れピンをペンチで抜き、島田はナットーを緩めていた。

見たこともない大きなナットーで、モンキースパナでは合わなく、パイプレンチを持ち出した。解体したのを受け、軸のピンを引き抜き、すべり出る滑車を注意して取り出す。

これを洗いウエス（布切れ）に乗せ、外枠と滑車、ピンの順に並べ検査を受ける。磨り減ったピンが一本出て、新替えとなった。たった一本を見付けるのに、三十二個をバラス結果になり、歯がゆい思いもある。増さんは満足そうに（良くやった）と納得した顔を見て、救われた。店員時は夕陽が落ちるのも、気にしなかったが、長い長い一日だった。

翌日は十九才の佐野は来なかった。単調な仕事で苦労も多く、張り合いもない、同じ四百円ならもっと楽な仕事がある、そう言って去った。島田は世間知らずの生意気な奴と言う、造船所やドックを渡り歩いただけに信憑性もあるが、楽な仕事なら自分も移りたい気も掠めた。ただ、頭をさげて職を頼みに行った手前、せめて一ヶ月は我慢する。

土砂を掘り起こし、モッコを担いだのは更に単調なもので、それすら一ヶ月続いたし、自分にはやめるにやめられない事情もある。

増さんに連れられ、同じ船の三番船倉へ行く、途中で船の外板にしがみ付く男がいた。島田はカンカン虫（錆落とし）と、見下して言うが、板木の一枚に乗り、左右のロープで吊られている。怖くないのだろうか、まるでサーカスの曲芸に見えた。

三番ハッチには船倉へ降りる人達が、三十人もたむろしていた。各自安全帽の下に手ぬぐいを被り、目だけ残して覆面のように覆う。話し声から女も半数いるようだ。島田は（掃除屋と一緒か）と、これもしかめ面で言った。我々も同じ船倉へ入るので、お互い船底の仕事になる。彼らはゴミや廃液をバケツで汲み上げ、手渡しになる。ロープで吊り上げるから、掃除屋が船倉を占めて、我々は遠慮がちになり、捗らないのだ。彼らの衣服を見て、はたと思い当たった。物置に同じ汚れの作業衣が何着かあったし、確か船の掃除と言った。そうか、父はYドックで掃除屋をやっていたのか。

貨物船の船底は二重底で、燃料や飲料水を入れたり、荷のバランスを取るため、海水で調整する場所になる。船がドックへ入ると錆びを防ぐ施しで、掃除屋が入る。我々はその上にあるバルブのオーバーホールだった。四十代から五十代と、おぼしきおばさん達は（怖いよう、ハシゴは嫌いだよ）（太っているから落ちないで）と冗談めかして言い、おずおずと船倉へ入って行く、軽口に取れても全て本音に違いない。

先ほどから自分だけが、挙動不審のようにウロウロして、判っていても震えが止まらなかった。何度もハッチへ寄っては戻り、下を見るたび足がガクガクした。体育館ほどの広さはあって、船底深く鉄のハシゴが伸びる。火の見やぐらを二本繋いだ長さはあろうか、暗くてハシゴの先は暗闇に没し、先端は消えている。底無し沼へ落ちるようで、足がすくんだ。増さんは付いて来いとばかり、ハッチの縁に足を掛け、スタスタと闇の中へ吸い込まれる。島田は少しも気に掛けずに従うが、見回しても自分一人が残され、最後になった。まさか子供のように、降りられないって泣き出すわけにはいかない。

父も掃除屋なら、毎日昇降するハシゴなのだ。店の経験すらない父が降りるから、降りられないはずはない。と思っても理由はまだある、大黒柱の意識から、借金や家族を思えば必死の覚悟で従事したのだ。後押しをするなら何としても降りなくてはならない。降りられない程度の思いから、店をやめたわけではない。ましておばさん達ですら、無駄口叩いて降りて行った。何がなんでも降りなければと、自分に言い聞かせた。

ハッチの縁に掴まり、鉄の丸棒に右足を乗せる、意識しなくても震えが走った。

十ミリの鉄の丸棒を握っても滅法細く、ハシゴの幅は三十センチもない。同じ丸棒の上に左足も乗せた。その瞬間、肩の道具入れが揺れ、死神が引っ張るようでゾッとする。

なるほど、我々にはこんな仕事があるから道具を担ぎ、両手を使える状態にするのか。そう思っても落ちたら最後、即死は免れない。こんなところで死ねるかと思い直し、右足で次の棒を探り、おずおずと下ろす。だが、両手が離れなく、ぶら下がる不様な格好だ。

左手で丸棒をしっかり掴み、右手を離して一段下へ掴まる。身を沈めて足を伸ばすと、次の棒に触れた、ホッとして反対の足も同じ棒にのせた。また右足を静かに下げ、棒を探し当てる。この繰り返しで船底まで降りられたが、背中は冷や汗でビッショリだった。

見上げればハッチ口が小さく見える。あんな高い所からよく降りられたと、しばし立ち尽くす。板木に乗ったカンカン虫より、距離があったからだ。空中ブランコのハシゴと同じで、麻のロープが鉄に変わっただけの物だ。ブランコは落ちても安全ネットがあるし、腰には命綱すらある。サーカスより酷で、なぜこんな危険な作業なのか、降りられた嬉しさより腹が立った。増さんへぶつければ（甘ったれるな！一人前だろう）おうむ返しに飛んでくる。あの人は金銭に露骨で、そう言われたら二言もない、未熟者には危険手当と諦めた。船底から五、六メーター上に足場が組んである。外から見れば喫水線の辺りだろうか、二人はその上で猿のようにたたずんでいた。生きるか死ぬかの思いをしても、どこ吹く風とばかり、素知らぬ顔が恨めしい。慣れてしまえば何でもないと言いたい顔で、さっ

そくバルブの取り外しに掛かる。一人前とあからさまに言うので、増さんの立場で考えた。未熟者を前にすれば、そうも言いたくなるだろう。言われる前に（俺がやる）と、遅ればせながら買って出た。フランジ（パイプの繋ぎ）のボルト、ナットーが錆び付き、悪戦苦闘した。見よう見まねで奮闘しても、らちがあかない。

「時計の針が回る方へ動かせば締まるので、反対に回せばゆるむ」

島田が小声で気遣うのが嬉しかった。ボルトの寸法は五分で、六本繋がり、錆びもあって最後の一本が外れなかった。増さんは見兼ねて変わってくれた。ナットーをゆるめるにも、スパナーを左右のどっちへ回していいのか知らなかった。錆の出たナットーを何度も空滑りさせ、六角の角がなくなり、モンキースパナでも歯が立たない。増さんはタガネを手に、ナットーを割りだした。ハンマーの重さは金槌の倍はある。鉄のナットーを鋼のタガネで割るから、ピッチャーのようにハンマーを大きく反らし、勢い付けて打ち込む。手を打ち損じないか、ヒヤヒヤした。五分のナットーは見る見る内に亀裂が広がり、中のボルトが見えてくる。やはり昨日今日入った者と、同じ四百円では虫の居所も悪くなる。矛盾を感じても人集めのため、大沢氏が世間並みに出すのは承知なので、誰も文句は言えない。ベテランが新米に当て付けるわけで、出入りが激しくなる原因にもなっている。

バルブがロープで巻かれるのを確認して、最後の一本を抜いた。ガタッと外れたが、ロープで繋がっている。すかさず増さんはバルブに手を突っ込み（ボールがない）と言う。船の汚水は上からの圧で、ボール（空気の入らないゴムのかたまり）が押され、海へ流れる。圧が弱まると喫水線の下にあるボールは海水に押されバルブに収まる循環だ。

長い航海でボールが磨り減り、失ったらしく補給になる。増さんはホッとした表情で、

「磨り減って、反対側へボールが詰まると、汚水が溜まって大変なのだ」

その余裕からか足場の上で小休止になる。先の掃除屋さんはマンホールのような蓋を開け、電灯のコードを手に、一人、二人と潜って行く。手持ち無沙汰でぼんやり見ていた。

父もYドックで、あの一人になるのかと思うと、内容を聞きたくなり、

「なぜ長いコードの電灯を手に、入るのですか」

増さんは作業が順調で、機嫌が良かった。

「ビルジは一メートル弱の、四角い空間になり、四方に人が出入りする穴がある。電気もなく真っ暗で、これが船底一杯に広がり、立って歩けない。ちょうど運動会の障害物競走で、倒したハシゴを這って行くようなものだ。広くて迷ったら出られない恐れもある。命懸けの作業だ。掃除をするにも電気をつけ、終わればコードに伝わり戻って来る」

島田も知っているとばかり口を挟んだ。
「時にはガスも溜まり危険なのだ。幾ら金に困っても、這ってまでする仕事は屈辱だから就きたくない。あんなに汚れてドックで一番汚いのは掃除屋だな」
「島田は独身だからほざけるが、船が入らない時とか、仕事が切れたら俺だってやる。女房子供を食わせるには、油まみれでやるしかない」
「職人だから言えるので、あんな仕事を本当にします？」
「汚れても職業に貴賤はないと言うだろう。それとも仕事がないからって、野垂れ死にするのか。あの人達だって、手に職があればやらないだろう。ハンマーすら打てなければ、やらざるを得ない。お前達も仕上げ工を身に付けろ。日本中どこへ行っても仕事にあぶれることはない」
二人の会話は父が掃除屋だけに意識した。気になっても父は店しか経験ないし、ハンマーも打てない。資金もないしリヤカーを引くよりなかったのだと、思いを巡らした。下請けは疎外されると思ったが、船底を境にさらに曰く付の職場があった。
習練が足りなく、ハシゴすらままならないのに、増さんと同じ日給だし、自分は恵まれている。父は過酷な職場で、病の身でも家族と借金のため、休まず勤めていた。
世の中が沸騰しても、手に職がなければ這い上がるのも難しい。必死に家族を支え、借金を払う姿は伺い知れて、後押しするのは当然だろう。
頼りの島田が突然やめた。年も近くター坊に似て実直だったが、自尊心が強かった。船倉のバルブは汚水と聞かされても、島田は（便所のパイプなのだ）と執拗に食い下がった。のらりくらり増さんは躱しても、翌日には根負けして（そうだよ）と白状した。騙された気もしたが、前から疎まれる仕事は下請けに回るのは承知だ。仕方がないと諦めたが、島田は知った当日に帰ってしまった。話の合う相手だけに説得できない歯がゆさを感じた。
幾ら出入りが多くても、やめられると困るので、隠したのも判る。ただ新米にさせないで、便所と知りながら自ら素手を入れ、ボールを探したのを思えば、納得できなかったのか。渡り歩く覚悟なら便所だろうと、多少の我慢はできるはず、自分のように切羽詰った状況でもないからだ。
一ヶ月は瞬く間に過ぎた。保土ケ谷で一緒に寝起きして以来、不思議に徘徊もなく助かっている。もっとも母は心配で、出歩く時は昼間でも付いて行くが……。弟に鼻歌が出た、気が付かない内、満ち潮が引くように、静かに病も引いてくれないかと願った。

時に日曜日も出るが、甲板の上で仕事の手を休め、ター坊は今頃何をしているのか、店を思う余裕も出た。二度とない青春を謳歌できる彼が羨ましい。世の中には苦もなく過ごせる人はいても、世の変遷を思えば増さんの、どこへ行っても食いっぱぐれのない方を選びたい。父のように年を取ってから危ない思いをしたくないし、手に職を付ければ、いずれ借金のない生活に繋がるだろう。四方を海に囲まれた国だ、大小の船は存在して、仕上工の仕事は尽きないだろう。幸か不幸か夜を見守る必要から、例え辛くても、自尊心を傷つけられても、見切りを付けるわけにはいかないのだ。

丘陵の坂を登っていると、前を父と母が歩いていた。心配で母が迎えに出て、買い物ついでに昼間でも付き添っている。二人の後ろ姿は疲れた足取りで、年を取ったと哀れに感じた。家はAドックよりYドックが近いので、朝は自分より遅く出て、戻る前に帰っているが、今日はたまたま遅れたらしい。あんな仕事では疲れるし、母も作業衣を見れば、汚れで察しは付いている。その作業衣すら重そうで、後ろから手を伸ばし、風呂敷包みを持ってやる。びっくりした様子で呟いた。（やぁ、お前も一緒の電車だったか）ほころぶ二人の顔がある。母は歩きながら（苦労掛けるね）と言うが、苦労は祖母から弟まで一緒だ。

「慣れたから何でもないよ」

安心させるため声が大きくなる。登りの坂道で父は思い出したのか、

「この道はリヤカー引いて辛かったなぁ」

振り返ってポツリと言う、母はうなずいても言葉はとどこおる。常に一緒の行動だから思い出すのも億劫なのだ。夕陽が沈むのを眺めながら、三人並んで歩くと、過日の懐かしい日に戻り、S字の長い坂は感無量になる。両親の間で、両手を引かれたのは小学校以来だ。今は手を繋がないまでも、一時の間合いは、こはく色の写真を見るようで、気恥ずかしい気分になる。子供の頃は腕白で、近所へ謝りに出たのは母だった。迷惑掛けたうえ、（苦労掛ける）の一言で、ハッとした。いつまでも手を引かれるのではなく、はたち過ぎれば引く番だ。バスが通る坂道でも節約する家族だが、自分は良くても父は無理していないか。少しは治っているのだろうか。祖母は（お前が来てから安心して、起き出す気配もない）と喜ぶけれど、手足の傷と違って、特殊な病は見えないからもどかしい。

三ヶ月過ぎて、中でも一番難しい仕事が回ってきた。船倉やマストは何度も昇降して、以前の恐怖はなくなり、増さんの指示だけになり、露骨な（一人前）も聞かなくなった。

マストに足場が組まれ、ピンの磨耗を調べる作業だ。ワイヤーを指で掴んでも、指先が

付かないほど太い。それが両舷に各二本伸び、当然チェインブロックで吊る段取りになる。シャクルを外し、ピンを洗い検査に備えた。甲板に並べると大沢氏が見回りに来て、

「マストの高い足場は気を付けてくれ。お前が慣れたんで回したが、問題なさそうだな」

三ヶ月は危険な仕事をさせない計らいが判る。一時は泣き出したい危険な職場に腹を立てたが、ドックに無知な者への気遣いもあった。役立たずとか蔑まれなくすんでいる。大沢氏は探るような目で、

「先日、Yドックで親父さんとお袋さんに会った。お前のところはドックの一家だな」

（そうですか……）生返事になって、一瞬わだかまるものが残った。……Yドックで？一家というよりドックの親子だろう。大沢氏が両方のドックを回るのは承知でも、母がYドックまで迎えに出たろうか。一人で帰れないほど悪かったのか。祖母がいみじくも、（お前が来てから安心して）と言った。少なくても快方へ向かっている。じゃ、なぜ駅でなく、Yドックへ行ったんだ。急に恐ろしい思いが、入道雲のように沸き上がった。

父も母も、いや、家族全員で隠していないか、自分一人が知らないだけで、母は父と一緒にYドックで働いていないか。それも掃除屋さんで……。

確かAドックにも、女の掃除屋はいた。大沢氏が一緒に紹介した人とは、母じゃないのか。ここで大沢氏に聞けば、即座に判るが、怖くて聞けなかった。

丘陵の坂道は小走りになった。早く確かめたい、母に聞くより、物置の作業衣を見たかった。（ただいま）も言わず何着もある作業衣に飛び付いた。幾ら汚れるとはいっても、父の物がそう何着もあるはずがない。一枚一枚捲る内に見覚えのある、格子模様のシャツを見付けた。洗濯しても油やペンキの痕跡は残り、一目で歴然とする、隠すように掛けてあった。ガァーン！脳天に衝撃が走った。母も掃除屋だったぁ！一時、愕然となる。

自分が来て三ヶ月も、気付かなかった。昼間でも心配で付いて行くとは、暗に匂わせたのか。（もう少し）と祖母は言っても、八百屋をやめて八ヶ月だ。どんな思いで母が従事したのか、借金より怖い毎日だったはず。船倉の昇降が、あの坂道の足取りに出ていた。

怖くて泣きたいハシゴを、家事しか知らない主婦が、昇り降りしたのか。自分以上に生きるか死ぬかの思いに違いない。無理をしたから、端整でふくよかな顔も、恐怖で歪み、無残にも目がくぼんでしまった。申し訳ない！祖母から相手の立場と何度も聞いたが、まさか母が掃除屋とは、肝心な相手を見落とした。ドックの一家なんて恥で、ドックの親子でいいのだ。母の分は残業でも徹夜でもして、俺が掃除屋で支えてやる。

見慣れたシャツをジッと見詰めた。（近所へ出歩けない）と、笑ったのを思い出す。

常にほほ笑むやさしい顔を思えば、握る手が震えてしまう。もう二度と笑顔が戻らないのか、格子模様が胸を締め付け、痛いくらいだ。シャツを放せば暗闇の船倉へ、真っ逆様に落ちるようで握り締めた。熱いものがボロボロ落ち、シャツに染み込む。罪を犯した心境で、償いをしなければ暗い船倉から這い上がれない。そんな気がして無造作にシャツを掴み、台所にいる母へ詰め寄った。

「母さん、ドックをやめてくれ。俺が父さんとYドックへ行く」

無言の一瞬は何を考えるのか、不気味だった。やがて相好を崩し、うなずいてくれた。

ー終りー